慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Philip Wright gas prices in the UK : Markets and insecurity of supply（P･ライト著『英国におけるガス価格：市場と供給不安定』）
Sub Title	
Author	藤原, 淳一郎(Fujiwara, Junichiro)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2006
Jtitle	法學研究：法律･政治･社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.79, No.9 (2006. 9) ,p.93- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20060928-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Philip Wright

Gas Prices in the UK: Markets and Insecurity of Supply（P・ライト著『英国におけるガス価格――市場と供給不安定――』）

一　わが国では、電力市場及びガスの小売市場の六割強が自由化され、残る家庭用需要家を含めた全面自由化の（是非・時期・移行措置等の）検討が、二〇〇七年度に審議会で開始される予定である（藤原淳一郎「ガス市場の自由化」二一世紀フォーラム一〇三号八二、一〇六頁参照）。電力・ガス自由化のトップランナーである英国のガス市場について、評者の直弟子の日本大学助教授友岡史仁君の一連の緻密な研究（「国有企業時代の英国ガス事業」法学政治学論究四〇号、「英国ガスの民営化について」同誌四二号、「一九九五年ガス法制定後の英国ガス市場自由化の展開」同誌四五号、「英国ブレア政権下のガス事業規制改革：一九九七年から二〇〇一年まで」同誌五〇号等）がある。友岡君の続稿が待たれるところではあるが、本書は、経済学者の目から二〇〇三年以降の英国のガス価格高騰と今後の政策課題を分析しており、わが国での議論の素材としても、極めて貴重な研究である。

本書著者のライト教授は、ケンブリッジ大学で経済学を修めた後、アムステルダム大学で経済学博士を取得し、二〇年以上にわたり石油・ガス・電力のエネルギー産業及びその自由化を研究するシェフィルド大学（University of Sheffield）エネルギー政策及び経済学教授である。彼は本年二〇〇六年三月、アムステルダムで開催のフレム（Flame）欧州ガス会議一日目「英国セッション」の報告者であったが、評者は、別セッションに出ていて聞き逃したため、九月下旬ロンドンで開催のＩＩＲガス会議の翌日に、シェフィルド大学で面会の約束をとりつけている。

二　本書の構成は、序言、第一章・需要、供給、自由化（一―二三頁）、第二章・英国ガス・チェインの所有［関係］（二四―五一頁）、第三章・市場と契約（五二―七六頁）、第四章・卸価格（七七―一一一頁）、第五章・被規制費用：輸送と配給（一一二―一三四頁）、第六章・最終［小売］ガス価格（一三五―一五二頁）、第七章・結論と政策展望（一五三―一六二頁）の全七章のあと、参考文献、索引が付されているというものである。

著者は、本書序言において、英国ガス卸価格の乱高下と高騰の市場行動の原因について、包括的視点を樹立することを試みるという。具体的には、英国ガス市場について、（石油随伴ガスの比重の増大を含む）国産ガス、輸入ガス、国内需要の季節的変動等の需給構造（第一章）、ガス市場の上流（ガス田）から下流（供給）までの各レイアの有力企業及び電力市場との融合を含む市場支配力の有無（第二章）、従来の長期契約から自由化後の短期取引を含む市場及び契約形態（第三章）、ガス卸価格の乱高下の現状と、ガス卸価格と需要との相関関係（消極）、自由化後の様々なガス価格相互間の相関関係（一部積極）、石油価格との相関関係（消極）を分析し、過去のガス卸価格形成の諸誘因（triggers）から価格形成類型（Thypologies）化を試み（第四章）、高圧及び低圧輸送システム、アクセス費用の規制時代からオークション導入、需要家群ごとの最終ガス価格に対する輸送費用の比重の差（第五章）、非家庭用（non-domestic）と家庭用とに分けて、卸価格の変動のガス最終価格（final price）への寄与度を分析し（第六章）、終章において、「自由化」自体は成功だが、ガス価格高騰の家庭用及びガス多消費需要家への影響を考えて、料金規制と生産者による貯蔵の二つの政策提言とともに、市場原理（market fundamentals）の面では、石油価格連動性への再考察とＬＮＧ輸入増による供給安定化を示唆し、最後に供給問題及び環境問題の観点からエネルギー需要の削減の重要性を指摘する（第七章）。壮大な自由化実験の英国ならではかも知れないが、引用される政府文書、ことに電力・ガス庁（ＯＦＧＥＭ）の市場分析の報告書の多さと内容の密度には感心させられる。著者が、右以外の幾多の資料を駆使していることは、いうまでもない。

三　評者なりに著者の注目すべき指摘を拾うと、①短期的供給減等の供給ショックへの対応は、従前の垂直統合国有企業なら企業内でリスクを吸収できたが、「自由化」後は、供給側も不確実性が高まり（一七—二〇頁）、他方、需要側にとっても、供給者変更の途はあっても抜本解決にはならず、供給中断（interruptible）条項付き契約や燃料転換等の需要代替可能性も限られていること（四—八、五〇—五一頁）。②市場シェアからみると、シェルは上流ガス田で、（旧国有企業系）セントリカは、ガス田、貯蔵、家庭用（domestic）で優位だが、「市場支配力」の有無としては、力の行使、換言すれば企業ポートフォーリオが問われる。価格リスク回避のための企業ポートフォーリオの典型的二例として、家庭用需要家市場専念の（ドイツ系）

RWEと、上流の資産をうまく下流市場に生かすセントリカの両者（四七―五〇頁）がある。セントリカは、上流のガス生産高減少を卸価格引上げで相殺し、小売価格引上げによっても営業利益率が上昇していること（四七―五一頁）。③わが国でも関心の高い小売市場での需要家による供給者変更（switching）の分析（七五―七六頁）、④二〇〇二年四月以降料金規制が撤廃された家庭用ガス価格の近時の上昇の要因を、電力・ガス庁は卸価格の上昇によるものと分析するが、著者は最終価格の要素を解析した結果、卸価格ではなく供給費（費用と利潤を含むsupply mark-up）の上昇によるとの、貴重な分析（一四五―一五二頁）等がある。

次に三点ばかり、評者の疑問・感想を記しておく。

第一に、セントリカを（②④等）随所で問題視している反面、成熟した家庭用ガス市場に誰が参入を希望するか等の記述もあり（一五九頁）、著者が同社の「市場支配力」(market power) を、米国流の「独占化 (monopolization)」にせよ欧州流の「支配的地位の濫用 (abuse of dominant position)」にせよ (Cf. Mark R. Joelson, *An International Antitrust Rrimer*, 5-6 [2001]，藤原淳一郎「欧州におけるエッセンシャル・ファシリティ論の継承（一）（二・完）」法学研究七四巻二号、三号［二〇〇一年］）、競争法上「違法」とまで判断しているのかどうか、必ずしも明らかではなく、著者が法律家でないことを承知のうえでも若干の物足りなさを感じるというのが、正直なところである。ちなみに著者は、右の非生産的・不毛な議論（？）に代えて、家庭用需要家保護の処方箋を提唱している。すなわち、二〇〇二年四月以降価格規制を撤廃し完全自由化してしまった家庭用電力・ガス料金について、新たな規制（relative price regulation）の提案である（一六〇頁）。右提案は、従前の料金規制の手法であった公正報酬率（rate of return）規制（Cf. James C. Bonbright/ Albert L. Danielsen/ David R. Kamerschen, *Principles of Public Utility Rates*, 198ff. [2nd ed., 1988]；Richard J. Pierce, Jr./ Ernst Gellhorn, *Regulated Industries*, 94. [4th ed., 1999]）や価格上限（price cap）規制（植草益『公的規制の経済学』一六八頁以下［一九九一年］参照）の復活ではないにしても、いったん外した事前 (ex ante) 規制方式の復活が現実問題実現可能なものかどうか、また、右に提唱する料金規制によって、著者が問題視するような弊害を有効に除去できるものか等、興味深いものがあり、今後の詳論を期待したい。

第二に、著者が試みたガス卸価格形成誘因の類型化（一〇九頁）は、高く評価されるべき分析だが、それぞれの誘因の確率や対処法が示されればともっとよかったのではないかと思うのは、評者の「ないものねだり」かも知れない。著者は、ガス卸価格の乱高下・価格上昇への処方箋として、ガス生産者によるガス貯蔵（storage）を提唱する（一六〇―一六一頁）。現時点でガス貯蔵施設（表一・四）は、ガス生産者に限らないで各レイヤが保有している（表二・五）が、著者のように今後は生産者が貯蔵を手掛けるといっても、価格を冷やす効果のある貯蔵を生産者が喜んで手掛けるということを期待するのは困難なように思え、著者としては、助成策込みでの義務付けまで意図するのかどうか、またそのことが、副作用として、生産者の市場価格への影響力を今以上に増すことにならないか、といった疑問も湧く。著者自身も認めるように、むしろＬＮＧ輸入による市場の安定（一六一頁）の方が、卸価格の低廉化・安定化に効くかも知れない。

　第三に細かいことながら、ガス価格と石油製品価格を比較するのなら、ガス・オイル（＝軽油）（一〇五頁）でなく代替燃料性の高い重油、灯油にすべきではないかというのが、日本のガス市場を前提に考えたときの評者の率直な印象である。

　英国の電力民営化に関しては、かつて評者が学部ゼミ夏合宿勉強会テキストにもしたJohn Surrey, *The British Electricity Experiment* (1996) が今や古典的名著であり、その後エネルギー全般についてのDieter Helm, *Energy, the State, and the Market: British Energy Policy since 1979* (2003) も良書であるが、これらはいずれも執筆時点の関係で、二〇〇二年以降の英国エネルギー市場の動きを収めていない。本書は、この意味からしても、英国ガス市場の現状を、図表を織り交ぜて大変読みやすく分かりやすく、かつ極めて冷静・客観的に説得力に富む分析をしており、右二著を引継ぐ秀作と評価できるものである。本書執筆時点（二〇〇五年秋）以降、〇五／〇六年冬場にまたもや英国のガス価格は高騰した（藤原淳一郎「欧州ガス市場の動向：ＬＮＧ争奪戦は世界的規模で激化する！」エネルギー二〇〇六年六月号二六、二八頁参照）が、本書のフォローアップの意味からも、その原因や処方箋をも含めて、本研究のさらなる発展を祈りたい。

(Oxford University Press, 2006, XV＋173pp.)

（二〇〇六年九月三日稿）

藤原　淳一郎